

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

余呉湖「徳山鮓」2004年開店 徳山浩明さん

樽では「熟れ鮓等発酵食品の研究第一人者」鮓壽司は世界「ジビエの腸詰」とか一杯聞いていました。我が家の別荘は、お店から近距離ですが、ひと山越えられないために大きく迂回しなくてはたどり着けません。そこで、京都駅から近江塩津行に乗ると90分で、新幹線に乗り継ぐと60分到着駅にはお店の迎えが待っていてくれます。

今年のお正月は、余呉湖の小ワカサギの天麩羅、鮓壽司、ジビエ熊鹿猪の燻製、鱒の親子で透明のイクラ？圧巻は月の輪熊のしゃぶしゃぶは絶品でした。再度六月の誕生日に訪問、来初春は4回「月の輪熊のしゃぶしゃぶ」を予約しました。

私は奥田将太(枝魯枝魯京都店長)さんにご案内いただきました。今まで話だけは聞いていたのですが彼のお蔭でお店にたどり着きました。

京都文化博物館

《没後80年。時代を超えて、今もミュシャは生きている》

10月12日～13日

オール・ヌーヴォーを代表する芸術家アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)。「線の魔術」ともいえる繊細で華やかな作品は人々を魅了し、ミュシャ様式と呼ばれるそのスタイルは後世のアーティストに影響を与えてきました。ミュシャ財団監修による本展はミュシャ幼少期の貴重な作品、自身の蔵書や工芸品、20代に手掛けたデザインやイラスト、そしてミュシャの名前を躍り有名にしたポスターなどを通じて、彼の原点と作品の魅力に迫ります。さらにミュシャ作品から影響を受けた明治期の文芸誌の挿絵から1960-70年代のイギリス・アメリカを席巻したグラフィック・アート作品、現代の日本のマンガ家やアーティストの作品まで、およそ250点でミュシャ様式の流れをたどります。

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《なぜデフレを放置してはいけないか/岩田規久男著》

消費増税は必要なのか?⑤

一向に収まる気配の無い米中貿易戦争、緊張の高まるベルシヤ湾情勢、さらには最悪と言われる日韓関係等わが国を取り巻く経済環境は厳しさを増す一方だ。そんな中で消費増税は予定通り10月に実施される。家計への影響を考慮し軽減税率やキャッシュレスでのポイント還元の実施、プレミアム付商品券の販売等の対策が考えられているがどの程度有効に作用するかは未知数である。筆者の岩田氏は本書でデフレの脅威を分かりやすく解説し日本経済再生の最重要課題はデフレ完全脱却であると述べている。元日銀副総裁として「アベノミクス」を主導、異次元の金融緩和を実践してきたが、14年の消費増税により折角進んでいた脱デフレの動きが止まり経済は停滞してしまった。氏は消費を低迷させる増税には断固反対している。

土口哲光和尚の説法

《母は太陽で、大地なり》

知人から「母が亡くなりましたので、葬儀の導師をお願いしたい」と依頼された。処暑も間近の京都盆地に新涼の忍び寄る日である。葬儀会館内の両壁面いっばいに供花が飾られた告別式前日、夕刻の枕経を、知人の喪主・家族・親族らがうちそろって勤める際、享年九十一歳の棺に納まる母堂に對面して、思わず「美しいお顔ですね」と声を出してしまった。一切の邪念から取り除かれ、修行を終えた華嚴の相を見たからである。続いて執り行った通夜読経の後での説法でもその感動を胸に「百億の人に百億の母あれど、我に勝される母はなし」という諺のとおりです。母は家庭の輝く太陽で、子どもを育む大地でもあります」と語りかけた。葬儀は重大な後の者の大仕事である。

季節の家庭料理 田村 真紀

《十月 秋ナスのエビはさみ揚げ》

《作り方・四人分》

秋ナス二本・むきエビ百五十グラム・生姜すりおろし小さじ一・白ネギみじん切り大きじ一・酒小さじ一・塩コショウ少々・片栗粉適宜
衣(卵黄一個と水百ミリリットルを混ぜ、薄力粉五十グラムを合わせさっくり混ぜる)

秋ナスは二センチ厚の輪切りにして、厚みの真ん中に切り込みを入れる。水にさらし、キッチンペーパーで水気をしっかりと拭く。エビは背ワタを取り、包丁でたたい細かくし、生姜、白ネギ、塩コショウを合わせしっかりと練り合わせる。ナスに(切れ込みの内側にも)片栗粉を薄くはたき、エビを挟み形を整える。衣にくぐらせ百七十度で熱した油で上下返して色よく揚げる。

つれづれの記 山崎 辰巳

《ベストをつくそう》

東京五輪2020の開幕まで一年を切り、来年7月24日～8月9日の会期中に33競技339種目、その後にはパラリンピックも控えている。オリンピックまぢかになると必ず噴出するのがメダルへの話題と期待である。特に今回は自国開催とあって、マスコミも競技団体も、そして一般国民も、いつも以上に日本人選手活躍への期待に熱が帯びている。どの競技の選手も出場枠を勝ち取るために、今、必死になって努力しているはずだ。やれ金・銀・銅とか、表彰台に日の丸を、といった気まぐれで無責任な取り巻きの期待や重圧に押し潰されることなく、「ベスト」をつくして、代表選考に向けて持てる力を最大限発揮し、挑戦してもらいたいものだ。